
姉 × Sisters + オマケ

城崎海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉×Sisters+オマケ

【Nコード】

N5182E

【作者名】

城崎海

【あらすじ】

姉達と甘々な生活を送る俺の物語！！ブラコンな姉達が織りなす、弟争奪戦のような…気が…しないでもない姉×5+オマケの物語姉が好きな人は特に！好きじゃない人は自己判断で読んでやって下さい。姉好きの姉好きによる姉好きの為の小説ちよいエロ予定！！

第一話 姉達と危機とファースト

現状とか説明する前に

取り敢えず、色々自己紹介とかしちゃうことにするよ。

俺は、かなた ゆっき 彼方結城

ある一点を除けばのそ

そこら辺にいる平凡な男子高校生と変わしないと、俺は思ってる。

変なノリになることもあるが、それでも普通でしょうー！っていうか普通であってくれ。

それで…ある一点ってのは……

「なぐんで、布団の中に入ってやがりますか…アンタは……」

「へへ、ゆうくんあつたかいし」

理由にならねーよ

あつたかい所に入りたいたらコタツ入ればいいじゃん。

出してないけど……

ある一点、姉が異常なぐらいブラコンである事。

うん、限りなくおかしいね。

まあ、この姉だけの話じゃありませんが……

取り敢えず、あのブラコンには布団から、っていつか俺の部屋から出て行って貰った。

着替えたかったからな

それ言っとマジで居座ろうとする危険性が高いから言わなかったけど……

それでも暴れたし、うるさかったけど無視できる許容範囲内きょようはんないだいたい弟の布団中に入ってる姉ってどうよ？

取り敢えず今の状況を説明すると

俺が布団に居たのは朝だから、ということ。

別に深くないよな

浅い、浅すぎるっ！！ってくらいだと思うよ。

そして、あの姉の名前は彼方 莉子りこ

容姿はかなり良い、出るところは出て引っ込んどころは引っ込んでる。

簡単に言つとモデル体型だな。

顔もメチャメチャ可愛いし、若干童顔で

頭も良いし

ただ…さっきから見て分かる通り極度のブラコンなんだよ……

俺が他の男達から嫉妬されるくらい。

それに我が家の問題児はこの人だけじゃないしな。

何事もなく、着替えを終えた俺は朝食を取る為にリビングへと向かう。

家の構造は二階建てで、俺の部屋は二階にある

勿論、リビングは一階にあるから

俺は無駄に傾斜^{けいしゃ}の高い階段を下りないといけない。

「みんな、おはよう」

取り敢えずは挨拶

みんなと言つのは、他にも数人同じ家に住んでるから

まあ、家族

問題児はあの人だけじゃない、と口が酸っぱくなるほど言っていたけど……

「おはよう、結城」

今、挨拶したのは彼方 ^{さおり}沙織

新聞を広げて見ている、なんとも親父くさい……

本人の前で言ったらどうなったものか分かったもんじゃないが……

何故だろう、またこの姉も可愛い…いやクールビューティーで綺麗と言っべきだけど。

それに強いんだ、俺なんか比じゃないくらいに

またこの姉もブラコン

だいたいわかると思うけど。

因みに彼方姉妹三女だ

莉子姉さんは次女

ということは、もう一人居ることは確定してるわけだ。

「おはよう、ゆう君！ご飯出来てるよ」

エプロン姿にスーツという異質な服装で俺に朝の挨拶をしてきたの

は彼方 ほこん 雫 しずく 彼方姉妹、長女

彼方家の殆どほこんの家事は雫姉さん一人でやってる。

まあ、偶に俺も手伝ったりはする

姉二人は全く

っていうか、こっちが手伝わさない

あの人達に家事なんて言葉似合わねえよ

散々暴れ回して処理こっちがする羽目になる

経験済みだ

まあ、その後雫姉さんの怒りの鉄槌てつちが落ちたわけだけれども。

雫姉さんは社会人だ

結構有名な会社に働いてて

やはり容姿も良くて

その為に告白も絶えないらしい

まあ、この点は姉妹全員だ。

でも残念ながら…もう言わないぞ

「ありがと、雫姉さん」

家事をしてくれてるって事は、料理も雫姉さんが作ってくれてるし
うまいよ、かなりね。

「ああ、雫姉さんには優しいんだ！！ゆうくんは」

何時からリビングに居たんだよ、莉子姉さん。

「それは右から左には受け流せんぞ結城」

マジで…アンタら二人は……

最早、あのブラコン二人組はスルーする事にした。

構うとまた調子に乗るし。

取り敢えず、この美味しそうな朝食頂くとしよう。

「な〜んで、雫姉さんには優しいのかな〜、ゆうくん！！」

「どついう事だ結城！？」

横からギャアギャアと声が聞こえるが無視。

「いただきます」

箸で玉子焼きを摘んで口に放り込む。

うん、何時も通り美味しい。

雫姉さん…あまりキラキラした目で見つめ過ぎないでくれ……

「うん、美味しいよ！雫姉さん」

てか、いつも美味しいんだがね…

それを言った瞬間、当社比二倍くらいで目の輝きをアップさせる。

「本当！！やっぱゆう君可愛い！！」

抱きついて来ようとする雫姉さんの頭を掴んで止める。

何時も同じ展開だし、しつこいなコレも。

「よしゆうくん、それでこそゆうくんだよ！！」

頭をおさえれば俺って、どうゆう基準だよ。

「姉さん達も早く食べれば」

俺の反応をずっと見てて料理にずっと手付かず。

「そうだね、食べちゃおうかゆーくんを！！」

「食べちゃおうって…どういう…」

「りい姉、良い提案だ！！」

沙織姉さんも納得する所じゃないよ！

「私も賛成！！ゆう君…覚悟！！」

って、朝っぱらから貞操ていそうの危機ですか！？

「ふわーあ、ご飯出来てる？ 雫姉さん？」

俺が貞操を失いそうになっている時に、二階から大きな欠伸をして降りてきたのは

彼方姉妹四女

彼方 茜あかね

彼方家で唯一マトモな人だと俺は思ってる。

弟としてちゃんと俺を見てる…と思う。

お酒を飲ませたら…まあ言わない。

…ああ後、唯一は訂正しよう。

俺もマトモだし。

「ってアンタら姉さん達なにやってんの！！」

俺が絶対絶命の状態を見て茜姉さんが止めに入る。

さすが茜姉さん!!

うんうん、それだよ普通!!

今までは異常

この人達、異常!!

「えっ!! ゆーくんに迫ってるんだよ」

莉子姉さんがとぼけた顔をして茜姉さんに返答。

とぼけた顔も可愛いのが、なんかズルい
美人って得だ

そうだよね、莉子姉さん!!

見ればこの状況大体把握できるよね

って、ちゃうわ!!

なにあっさりなんでもないかの如く答えてんだよ!!

「はあ、ゆーくん食べたかったのに」

「ここまでだな」

「ゆう君、食べ損ねたか……」

なんで露骨もつにそこまで落ちこめるんだよ……

弟相手だぞ……

ここまでツツコミ所満載な姉居ますか…？

いや、居ないとは言いきれないか……
世の中広いからな。

まあ、全て言葉には出してないからこの独り言は何もかも意味ないけど…

「まっいつかつ！！後でも良いし、でもあーちゃんは素直になった方が良いよ」

「なっ！？私はソナコト…」

後でするんかい！！とは言わない
折角姉たちのやる気が萎えた訳だ、ぶり返す必要は無いと頭の中で
コンマ三秒で思い付いたわけで。

茜姉さんは顔が真っ赤
沙織姉さんと莉子姉さんはニヤニヤ
でも意味不明な俺。

ああ…なんか虚しい…自分一人だけ理解出来て無いだろこれ
因みに雫姉さんは茜姉さんの朝食を準備してる。

偉いな文句一つ言わず
見習いたいよ。

俺は確実に文句言うし

「あゝ、もう仕事だ…うゝんもうちょっとゆう君と戯^{たわむ}れていたかったな」

戯れるって俺は犬ですか!?

もう会社に行く時間か…

今日は土曜日なのに大変だよな。

家ではこんなブラコンでダメダメな姉でも

会社では重役を任されていて部下にも信用が厚い仕事人に変身する。

彼方家七不思議に認定って感じ。

でも、一度聞いたことあるんだよ

家と会社でオンオフ使い分けてんのか?って

そしたら平然と

「うん、ゆう君と一緒に居たら常にあらゆるスイッチがオンだよ」
って言ってた。

寧ろ言^{むし}いやがった

俺が言いたい事は…

家でオンなんかい!!普通逆だろ!!

あらゆるスイッチってなんだよ!?

とまあ色々あるがどれも言わず。

「そうか…」と返しておいた。

どうやら俺は心中に言葉を溜めておく性格らしい。

取り敢えず、雫姉さんを玄関まで見送るとしよう。

なんでこんな事をするかというと、弟は玄関まで家族を見送る。というルールを作られたからだ。

まあ、大した苦じゃないから構わんが…
なんか、納得出来ない。

「見送りありがとつ、ゆう君」

「いや、別に構わないよ雫姉さんにはお世話になってるし」

「じゃあ後、頼み事一つ良いかな？」

頼み事？なんだろう？

「良いよ、一つぐら…ん！！」

「ごちそうさま、いってきます」

雫姉さんはイタズラが成功した子供のような顔をした後、そのまま家から会社へ向かう。

放心状態だった俺も指で唇をなぞった所でなにされたか理解。

一瞬雫姉さんの顔がすぐ俺の近くに来て一瞬で離れた。

軽く触れるだけだったけど間違いなく……

第一話 姉達と危機とファースト（後書き）

初めまして、城崎海です。

元気ですか？ああ、元気じゃない…！すいません野暮なこと聞いて…！

とまあ、冗談はこのくらいで

これを見てくれた人は、アレかな？姉好きかな？

私も好きです（笑）

取り敢えず頑張って書きます！なるだけ必死に…！

感想どしどし募集しますよん

第二話 次女、三女とキス戦争

『ドタドタドタ』

騒がしい足音が近くまで迫ってくる。

「どうしたんだ、結城！？そんな大きな声出して」

どうやら俺は声を上げていたらしい。

自分では気づいていない程衝撃的だったわけだ。

だってしょうがない？俺のファーストキスなわけだし。

「ゆうくん！？なにかあったの？」

沙織姉さんに遅れて莉子姉さんも玄関に到着した。

二人共過剰に俺の事を心配している事をありがたむべきか、呆れるべきか…

「で、どうしたんだ結城！？」

何時までもぼろっとしていた俺に痺れを切らしたのか、沙織姉さんが早く言えと急かす。

「いや…少し…」

「少なに！？」

莉子姉さん、ガクガク揺らさないでくれ吐き気を催すから。

「いや…雫姉さんに…」

「なにしてんの？姉さん達」

丁度、俺の言葉をいい具合に遮る茜姉さん。

「あーちゃんタイミング悪い!!」

「えっ!？」

「まあいい、続きを言ってくれ結城」

意味を理解してない茜姉さんは置いとくのか構わないけど…

「ただ雫姉さんに…キスされた……」

「ええ……!!!!!!」

見事言葉を同じタイミングで発する三人。
こうゆうのってハモるって言うんだっけ？

「キ、キスってあの唇と唇を合わせるやつなのかな、そうなのかな
ゆーくん？」

なんで俺を襲う時は普通なのにキスでは異常な反応するんだい。

「魚だよな…魚であってくれ」

魚ってどういう事ですか？

雫姉さんにキス（魚の方）された、ってどついう意味だよ！！

「いや、本当に口のキス……！！」

俺は今喋った事を後悔した。

なにも今後の事を考えずペラペラペラ……

なんで後悔か……

だってこの人達なら

「雫姉さん、許せない！！だったらゆうくんのセカンドキスは私が頂くんだから！！」

ほらね、完全に触発されてるし。

まあ、二人が俺へのセカンドキスを取り合って潰れてくれるから全然問題ないと思うけどさ……

なんか俺、ナルシストみたいなんだが……

「私が頂く、と言いたいところだが……争つてもしょうがないしセカンドは莉子姉さんに渡すよ」

て、オイ！！

見事に俺の目論見から外れてんじゃねえかよ。

「じゃあ私も妥協して、さおちゃんはサードね」

「なに勝手に話進めやがってんですか！？アンタらは……！！」

「フフ……」

なんかいかにも

「変質者ですよ」と言わんばかりの怪しげな含み笑いを彷彿とさせるような顔の莉子姉さん。

これは本格的にヤバイ…もう逃げるしかない！！

『ガシッ』

逃げようとしたその瞬間に素早く無駄のない動きで沙織姉さんに羽交い締め拘束される。

その小さな体のどこにそんな強い力が？

これってさっきよりヤバくないかな？

沙織姉さんに羽交い締めされている為動けない。

というかガツチリされてるからもがくことさえ出来ない。

近づいてくる莉子姉さんの目を瞑った愛らしい顔。

ていうか凄く可愛いな我が姉ながら。

正直もう流されてもいいんじゃないか？とか思い始めてる辺り俺もシスコンなのだろうか？

でもさ、しょうがなくなかないかな？

可愛いものは可愛いんだからさ。

所詮俺も盛りの付いたオスなわけ

「んっ」

そんな事を考えていたら、どうやらもう既に莉子姉さんの顔が近づいていたらしい。

というか唇が接触してる。

「ンッ…ジュル…アッ…」

莉子姉さんの声が耳元で艶めかしく聞こえる。

しかも莉子姉さんの舌が俺の口内をグチヨグチヨに犯している。

これって…ディープなやつでは!?

「そこまでしていいとは言っていないぞ!」

慌てて俺と莉子姉さんを離す沙織姉さん。

俺もここまでされると思ってたよ、全くな…

「ごめんね…ゆーくんが可愛い過ぎて我慢出来なかった」

明るいい顔して、反省してないような謝り方だな…

それに頬を桃色にさせて謝られてもな。

「はあ、ファーストキスがゆーくんで行った…」

って、アンタファーストキスだったんかい!!

彼氏が居るとかそういう類の話は全く聞いて無かったから居ないと

は思ってたけど……

そもそもブラコンだし。

つつか、ファーストキスで激しいのする人居るんだな……

なんていうか脱力感

うん、これは後遺症かな？

莉子姉さん？ああ、あの人は別世界にトリップしてる

「ゆーくん…ゆーくん…」ってうわごとのように呟いてんのが恐い
がな。

「って、なにやってんの！！姉さん達！！」

俺と莉子姉さんの熱い接吻を見て復活した茜姉さんが、今にでもキスしそうな沙織姉さんと俺の間に割って入ってくる。

さっきの時点で、さっさと正気を取り戻して下さい。

俺はもうかなりやられちゃってるから。

「なに？って接吻しようとしてるのだが結城に」

「見てわからないのか？」とでもいいたげな沙織姉さん。

勘違いしないでくれ、これは普通の事じゃないんだぞ。

「そんな姉弟で……」

もっと強く言ってやらないと駄目だつて。
負けたら最後だぞ、すぐに言いくるめられる。

「結城、顔を上げてくれないか？」

「嫌だつつつの！！茜姉さん助けて！！」

驚愕した顔するなよ。

わかったなんて言わねえだろ、普通の弟は

「フフ…結城…良い度胸じゃないか…姉さん達にはさせて私にはさせないと…？」

こ、こええ！！

いつもは穏やかな沙織姉さんの後ろに般若が見えるぜ。

ていうか、姉さん達にも、不意にとか無理矢理にとかが主だし。

そんな事が伝わって欲しい相手は全く理解してない風でかなり切れ
気味の沙織姉さん。

勿論、俺の心が読めるなんてあまりにも憲法を犯す能力を持っている
訳が無いので

俺の反論は聞き届けられる筈もなく。

今ならわかる…俺死が近い……

「フフン…私は可愛い可愛い弟に酷い事をする気は無いぞ…ただ姉
さん達と同じようにキスさせればいいんだ…」

沙織姉さんの顔、っていうか唇が俺に近づいてくる。

ていうか、そこら辺がおかしくないかな？

何度も言っけど、弟にキスだよ！！しないだろ普通。

まあ、今更の話だけども。

茜姉さんは何してるのかな？弟の最大のピンチに。

それよりも、最早家族の崩壊だよ。

茜姉さんの位置確認と様子を観察してみる事に。

必死で目を背け、こっちを見ないようにしてる……

ウブだったんだね

さっきの俺も似たようなもんだったけど。

今はヤケクソ？みたいな

ってそんなことどうでもいいわ！

取り敢えず、沙織姉さんを止めるすべを考えなければ。

止める？どうやって？

右見て、莉子姉さん…別世界へ。

左見て、茜姉さん…固まっていて使い物にならない。

自分を見て、力づくで…この人に？無理だろ、そりゃ沙織姉さんに勝てる気なんて全くしない。

それに女性は傷つけられ無い主義だし俺は。

ということとは、これって脱出不可能ってことじゃない…？

「どうしたんだ？ 結城からしてくれよ、勿論唇にマウストウーマウスでな」

ハハッ、っと屈託の無い笑みで宣^{のたま}う。

その笑みはかなり魅力的で一瞬クラッとなった、というのは内緒の話。

ん…！？

何時の間にか俺から沙織姉さんにキスする事になってない！？

突っ込んだら負けな気がするから突っ込まないけどさ……

「沙織姉さん、じっくり色々と考えてみない？」

「なにをだ、結城？」

いや、普通に疑問点が俺はあるのだが…

「姉弟でさ、キスするなんておかし…」

「おかしくないぞ、外国では姉弟で結婚なんて稀^{まれ}じゃないと思うぞ」

いや、稀なんじゃないの？ と言えないチキンな俺。

どうしようもなく怖い。

なんていうか色んな意味で

「さて、無駄話はここら辺で終わりにしてくれ、結城」

無駄話って…

それ止めたらキスするだけじゃん。

改めて言うがキスってのは嫌な気分じゃない。

勿論こんな美人とキスなんて夢みたいな事だし

かといって

「沙織姉さん、キスしよう」なんて簡単に言えない。

そこら辺は世間体、羞恥、e t c…

「ふわぁゝあ、おはようみんな…どういうこと？これは？」

二階から優雅そして華麗に舞う蝶のように、降りてきたのは

彼方家姉妹五女

彼方 猫仔^{ねここ}

名前に入っているように猫のような仕草がとても多い姉。

実際さつきは顔を手でクリクリしながら降りてきた。

更には頭を撫でたらかなり気持ち良さそうな顔をしたりして。

猫が好きな人にはオススメの一品！！

もち、ブラコンだよ。

しつこいかな？そろそろ

というか、まだ居たの！？って感じだと思っ。

大丈夫、これで終わりだから安心してくれ。

近所には彼方家美人五姉妹なんて言われてたり。

「なにつて、弟がキスをしてくれるという事だから待ちわびているわけだが…」

俺そんな事言ってないぞ！

因みに、いい加減に理解してくれみたいな顔を覗かせているが、猫仔姉さんは初耳だぞ。

「ふみゆう、本当なの？結城君」

「いや、違う！！断じて違うから」

「違うとはどういう意味だ、結城！！」

更なる混乱。

どうやら猫仔姉さんは救世主^{メシア}では無かったらしい。

都合の良い所で現れて助けてくれるドラマの主人公のような存在かと少し期待した俺が馬鹿だった。

現実とは甘く無い、つくづく痛感するね。

って、痛感してる場合じゃねえよ。

取り敢えず、空気が重い。

原因？勿論沙織姉さん

なんか怒ってらっしゃる。

「沙織姉さんだからね、何度も言うけど姉弟でキスっておかしいでしょ」

これ何回目だろう？

もう諦めた方がいいんでしょうか？

「ならばなんで姉さん達とのキスは良いんだ？」

それを持ち出されると……

ハッキリと言えばイイとは言っていないんだがね。

「ふえ、結城君…姉さん達とキス…したの？」

そういえば猫仔姉さんは聞いて無かったんだっけ……

「ああ、ちよつと色々とあつてね…でも俺から…」

「結城君…キス…しちゃったんだ…ふえええん」

ハッ！？

何故泣く！？

どこら辺に泣く要素が含まれてたんだ。

「ななな、どうしたんだ！！猫仔！！」

ってか、沙織姉さんの動揺っぷりも凄いな。

第一次彼方家弟キス大戦

彼方猫仔の号泣により終幕

第二話 次女、三女とキス戦争（後書き）

ああ、はい変態ですよ私

第三話 三女、五女と甘い展開（前書き）

腰が痛い…関係なし

もうひたすらに自己嫌悪を繰り返しながら執筆していますよ……

第三話 三女、五女と甘い展開

あのままでは何時まで経っても収集が付かないので
取り敢えず、リビングに移動した。

完全なる正常な状態とは言い難いが
ある程度意識を保っている人は簡単に移動させる事が出来たが……

猫仔姉さんと莉子姉さんは苦労した。

それは何故か

猫仔姉さんは泣きじゃくってこっちが相当な力を入れないと動かない。
い。

莉子姉さんは意識が無いため、普通の人より軽いと言われてもやはり
気を失っている人間を持つたらそりゃ重いわけで……

閑話休題

リビングに戻って来てから十分程が経過した。

猫仔姉さんも大泣きからすすり泣きぐらいにまでレベルが格段に下がったわけだ。

「落ち着いた？猫仔姉さん」

一応、心配だったし声を掛けておいた。
そこまで泣くものか？

って感じだけど俺に猫仔姉さんの気持ちが分かるわけでもあるまい。

だから優しくする。

うん、なんかナルシストみたいだな。

自分自身に痛さを感じたよ。

今の状況を説明すると俺がソファ―を背に床に座っていて、その隣に猫仔姉さん、テーブルを挟んで沙織姉さんと茜姉さんという状況だ。

ちなみに莉子姉さんは、俺の部屋のベッドにぶん投げといた。いや、ゆっくりと置いた。

…ぶん投げる勇氣無かったんだよ。

もしかしたら、将来奥さんに尻に敷かれるタイプだったりするのかもしれない。

それじゃあまりにも悲しいので、フェミニストだと思つ事にする。

「うん、大丈夫だよ…大分落ち着いたから…ふえ」

そういえば、そんな大丈夫か？みたいな質問をしたな……

ヤバい、もう年か…？

若年十五歳にして…

オイオイ勘弁してくれよ…

つと、これまた関係ない話に花を咲かせてるな。

「なら、良かった」

「ふわぁ……」

ニコリと微笑んだら、猫仔姉さんが変な言葉を出して頬を桃色に染めた。

もしかして…俺なんか恥ずかしい事言ったのか？

「そこ！！イチャイチャオーラを私の前で出すとは良い度胸だな！！」

俺はそんなイチャイチャオーラなんてイライラされるような物は出した記憶が無いが……

沙織姉さんが敏感になっただけだと推測。

結論は無視

ここで反論なんかすれば、一分後には俺の亡骸がリビングに転がっている可能性がなきにしもあらずだと思っただし。

「ふえ、そつ、そんなことないよ」

「うんうん、本当にまだ付き合い始めのカップルみたいだったよ、ねえ沙織姉さん」

沙織姉さんを見つめながら同調を求める茜姉さん。

あまり刺激するな！茜姉さん！

ざまあみろ、みたいな顔をしてるが俺はなにかしたかな？

もしかして俺の事嫌いなのか！？

オイオイ、軽く…イヤ、重くショックだぜ

実はかなりシスコンか…俺……？

…気にしないでおう。

「フフ…確かにな…」

「一旦落ち着こうか、沙織姉さん!!」

ゆっくり怒りを隠すように、沙織姉さんが立ち上がった。

どうやら、そんな事を考えている暇なんて無いほど状況が目まぐるしく変化していたらしい。

頬に嫌な汗がつたう。

ていうかこのままだと死ぬ。

まあ、死ぬとは言い過ぎだが五体満足で居られるとは恐れ多くも思わない。

否、思えない。

病院？止めてくれ、一番嫌いな場所だよ。

「やめてよ、沙織姉さん！結城君を傷つけないで!!」

そう言つて猫仔姉さんが俺を庇うように、そして体全体を包み込むように抱き付く。

ちょっと男性の憧れの谷が僕に当たってますよ!!

ってか、猫仔姉さん着痩せするタイプか！？

「うっ、止めるから結城にくっ付くのも止めるー!!」

猫仔姉さんはナヨナヨしていたが、どうやら効果はあったらしい。

まだ不満な顔をしていたが、沙織姉さんはビデオの巻き戻しのよう
にゆっくりと元に居た位置に戻っていった。

「ふう…助かったよ猫仔姉さん、ありがとう」

頭を撫でてあげる。

感謝の印

前、お礼をする機会が有って

「何が良い？」と聞いたら

「頭、撫でて〜」と言われたので、それからはずーっとこのスタ
イルだ

「ふみゅっ」

こうして頭を優しく撫でると、この猫…ならぬ猫仔姉さんは目を細
めて気持ちよさそうにする。

一瞬本当に猫だと思ってしまった俺はもしかしたら眼科に行った方
がいいのかもしれない。

「お前ら…私がここに帰った意味を理解してるのか…？」

「ご、ごめん、あんまりカリカリしないでくれよ」

「させてるのは誰なんだ？結城」

そんな怒ってたら綺麗な顔が台無しでっせ！

そんな軽口の一つでも叩きたい所だが、とてもそんな事が言える状況ではない。

猫仔姉さんと俺は俯き、茜姉さんは静かにコツチを静かに見やり、沙織姉さんは俺を睨んでる。

そして沈黙……

空気が重いとはこの事だろうか？

いつもは居る、やかましい莉子姉さんも、一番大人な長女雫姉さんも居ない。

普段はあの二人がなんだかんだで色々気を利かしてくれる為に、俺達もなし崩しみたいな形ではあるが収集する。

やっぱり、年上なんだと今にして気付く。

ある程度、敬うべきなのかもしれない

「ハア」

顔を俯いた状態で上目遣いで沙織姉さんをチラチラと見ていたら、沙織姉さんがいきなり深い溜め息をついた。

「ど、どうしたの？」

焦りながら、聞いているの丸分かりじゃんよ俺。

役者には向かないな

目指してなんかいないけど……

「いや、ただ私がこんな小さな事で怒って結城にでも嫌われたら、
と思ったら変な意地を張っている私がバカバカしく見えてな」

「ハア、良かった……」

情けなくもホッとした。

じっくり色々考えてみると俺は悪くない筈なんだが……

「なんかそこまで露骨に安心されると少し落ち込むな」

しよげるように肩を落とす沙織姉さん。

しょうがないだろ、生死の境を分けるわけだから。

「いや、たださ……沙織姉さんに嫌われなくて良かったな、と思った
だけで」

言っておくが嘘じゃないぞ。

生きるか死ぬかというのも重要な話ではあるが、やはり沙織姉さん
も含め姉さん達には嫌われたく無いというのもかなり重要だ。

俺はやはりシスコンみたいだ……
これもなんていうか悲しい限りで

「今更だが、結城ってかなりプレーボーイだな…」

今度は立場が逆転して、沙織姉さんが顔を俯かせる。

更には顔真っ赤っか。

それに感化されて俺も真っ赤っか

いや、そんなあからさまな反応されるとコツチも恥ずかしいから。

冷静になれば確かにかなり恥ずかしい事を言ってるな俺。

「ふみ、結城君!!」

また、自分でもわかるくらいに甘ったるい空気を出していたら今度は猫子姉さんに怒られた。

頬を膨らませて

とても年上とは思えないな…小動物的な可愛さ…まあ、猫だな。

「アハハ、疲れたから昼寝することにするよ。」

しかも、逃げる理由として弱すぎる

自分のボキャブラリの少なさを呪っちゃうね。

だが言い出してしまったからには引けない、引く気もない。

「結城君!!」

「眠い眠い、おやすみね!姉さん達」

逃避と言われれば、そうだと強く言い返してやるよ。

怒っている猫子姉さんを見無視してすばやく二階へ駆け上がる。

なんか、まだ言ってるけど俺は恐すぎて振り返ることすら出来ない。

情けないな、俺

今の心情、情けないなんて知ったこっちゃない。

こっちは色々な事がありすぎて、精神だけでなく肉体的にも参っちゃってるわけだ。

なら、もうそんなこと気にしてられるか！！と声を大にして言いたい。

とまあ、なんと云いますか恥ずかしい話をしている間に俺の部屋に到着。

ちなみに階段の傾斜が高すぎて転びそうになったというのは内緒。

「疲れた…」

部屋に入った瞬間、誰にでも無く呟いた。

いや、それは違うな…

自分自身に言った。

今日は本当に色々なことがありすぎた、マジで。

姉とのキス…しかもディープまで…
そして危機一髪、慰めるなどなど。

1日を締めくくる言葉っぱいけど、まだ一時なのよね。

まあ、いいや

昼寝するのは逃げるための口実のつもりだったけど寝ちゃおう。

どうしようもなく疲れたし……

第四話 次女と貞操の危機

「ん…何時だ…？」

P M 2 時

一時間しか寝てないのに起きちゃったよ。

正確には起こされたのかも…理由は後だ。

取り敢えず、眠い目を軽くこすりながら頭を覚醒させ上半身を起こす。

そして布団を一気に剥ぐ。

「イヤ、マジでアンタなにしてるわけ？」

俺はひとりでに誰かに問い掛けた訳じゃないよ、そんな痛い奴になつた記憶はない。

勘違いされたら困るので言っておくが靈感も無いぞ。

俺が問い掛けた相手はこちらを静かに向いた。

「ん？何って、ゆうくんの息子しごいてるの」

うおい！！飯にもうら若き婦女が息子やらしごいてるやら言っつんじやありません！！

しかも軽々しく。

俺は親か……

下半身のある一部分が何者かに触られてる気がして、布団を取ってみれば居たのは、愚姉もとい莉子姉さんだ。

「てか、何で？」

疑問符しか出てこない。

怒った猫仔姉さんが入って来れないように、部屋の鍵は閉めたし。

この愚姉がピッキングなんて高等技術を持ってるとも思えないし、その形跡（針金）も無い。

当の本人は

「ああ、そのことが」と言っポんと手を叩いた。

何のことだ？

「どゆことさ？」

一人で納得されても、一番理由を知りたい俺が永遠に理解出来ない
ので、説明を促す。

「あのね、気付いたらね、ゆーくんの部屋に居たんだ。」

…？

それは、答になつてな… ああゝ！！

… そつえば、放心状態だったのをここまで運んできたんだつタ…

脱力感にみまわれた俺は体をダラリとだらす。

「大丈夫、ゆうくん？」

ありがたいけどさ…

心配してる間だけでも、手の動きを止めて欲しいよ、俺は。

気持ちいいと思つた瞬間俺の負けだ… コレは……

「つて、なんでこんな事してんだよ！？」

遅いから！！気づくの遅いから！！

朝弱いんだよ…

朝じゃないけど、寝起きはボォーッとするってやつ？

「話、少し長くなるけどいい？」

長くなる程の事なのか知らんが、聞かせてもらわないことには何もわからない訳で。

取り敢えず、いつまでも忙しく動いている莉子姉さんの手を止める事に。

悲しんだような顔するな。

なんで何も悪くない俺が罪悪感を感じなきゃいけない？

「で、長くなっても構わないよ」

そうだったら、また俺のマイ・サンを触ってくる、愚姉。
触らせないと喋らないとか？それは姉とか言う前に人間としてどう
よ。

放っておくことにした。

俺の理性が極限まで続く限りだが。

今までは、ずっと冷静だったが、脳内では第二次世界大戦顔負けの
戦いを繰り広げている。

勿論、本能vs理性

情勢的には理性の劣勢も劣勢。

…当たり前だ！！莉子姉さんは美人なんだぞ！！
とまあ、逆ギレ風に言った所で解決はしない。

姉というストッパーがなければ豚箱の中かな？

「よしよし、説明するね！」

頭を撫でるのは止めて欲しい。

それとつべこべ言わずに早く説明をして欲しい。

俺も結構ヤバかったり

言い方は変だが

「ハアハア…」と俺も変質者のようなマズい息をつき始めてるし。

「最初から説明すると、気絶から華麗なる復活を遂げた、私、そして
回りを見回して見ると…なんと！！ゆーくんの部屋、ゆーくんの

「布団ではありませんか！！」

妙に芝居がかった抑揚の付け方。

別にコッチは下手な三流の芝居を見たいわけじゃないんだから、早めに結論に辿り着いて欲しい。

…いや、ワザと延ばしてるのか…？

ならばなかなかの策士だな。

今、俺は思考能力が何時もの比五割くらい低下してるわけだし……

関係ない話ではあるが、今の俺達の体制は息がかかるくらい近かったりする。

莉子姉さんが、俺の上に乗っかっている状態。

体はくっついていて、大きな二つの柔らかいお山は俺のアバラ辺りに押し付けられていたりする。

こんな状況は、なかなか体験出来るものではないだろう。

あらゆる意味で go to heaven

いや、寧ろ地獄か？

「って、人が話してる最中にどこ向いてるの！？ゆーくん」

そっぽ向いてるわけじゃなくて、直視出来ないんだよ。

と心では思いつつも恥ずかしさから何も言えない俺。

顔より下を見ないぞ！！と誓い姉さんの顔を見る。

「……!!!!!!!!!!」

だが目を逸らす。

顔だけなら！！と高を括っていたが、少し頬を上気させこっちを見つめている顔は何時もより色っぽくて、とても長い時間見ていられるものでは無かった、正直な所。

姉さんも目があった瞬間、目を逸らされた。

… もしや、なんか変な顔してたか？

「まつ、まあいいや！！そのままの体制で聞いててね」

何故慌てる！！

気持ち悪かったなら気持ち悪かった、と言ってくれ！！
いや、やっぱやめて立ち直れない……

一ヶ月間くらいヒッキー出来るかも……

「で、なに？」

阿呆な思考は停止させる事に
なんか、自虐しすぎだなあ俺。
自分を大切に私からのメッセージです。

アホ度合いがさっきより五割増しで上がってるが気にするな、気にしたら負け。

「あつ、そうだね…え〜つと、どこまで説明したっけ？」

「俺の部屋だつて気付いたとこ」

覚えておけよ！！と思いましたが、正直。ベツタリと引っ付いている

わけだし、考えてた事が飛んじやうつてのも分からんでもないが……
そもそも、引っ付いてる事がおかしいのか？

「ああ、そうだった！」

バカという言葉が喉まできたがギリギリで飲み込む、後が怖い……

「で、ゆーくんの部屋だつて気付いて、直ぐにリビングに行こうと思っただけど……布団から出られなかった……ゆーくんの匂いがついてたから……ね！」

赤く染め上がった頬に手を当てる、莉子姉さん

目の焦点が合つてないぞ、大丈夫か……？

俺も苦笑いになるわ、こりゃ

ん？よくよく考えてみると、布団に俺の匂いがついてたから出られなかった、と

ハッ！？もしかして俺つて体臭キツイの！？

自分ではそんな臭くないと思つてたのに！

いや、でも体臭とか口臭つてのは、自分では気付かないもんだからな……

「ゆっ、ゆーくんは臭いんじゃないって良い匂いなんだよ……！」

俺の落ち込んだ様を見て、俺が何を考えたか理解したのか、頭と手

をブンブン振って否定。

そこまで、やったら頭と手が取れちゃいますよ。

「で、それから？」

莉子姉さんの頭とかが取れて貰っても困るので、話を変えた。

恥ずかしいしな…

良い匂いなんて初めて言われた。臭いなんてのも言われた事無いが

……

香水なんかも付けて無いし。

もしかしたら、莉子姉さんの鼻がおかしいのかもしれないけど。

「ああ、そうだね！それでゆーくんの匂いで体を火照らしてたら、いきなりゆーくんの部屋のドアが開いてゆーくんが入って来たんだよね！」

火照らしてって……今、牛乳口に含んでたら吐き出したかも……やっぱ牛乳から水に変換してくれ、なんか卑猥ひわいだ。

「それで、まだ匂いを感じていたかったから、ピクリとも動かずやり過ぎそうとしたら、意外や意外上手くいつちゃって…」

手で後頭部をさすりながら舌をちよろつと出す莉子姉さん。

ちくしょー、可愛いじゃねえか！！

見とれてツツコミ忘れちゃったぜ。

いや、実際忘れちゃったぜ、じゃないよな。

いやその前に、ツツコミとかの問題なのかな？

結局、後の祭りか……

「やった、って喜んでたら、ゆうくん私が布団の中に入ってるのに侵入して来て……」

その時の事を思い出してるのか知らんが、莉子姉さんが頬に手を当てる。

なんていう失策……

ここでベッドがクイーンだった事が仇になったか……

「でも、入って来たらすぐ寝ちゃってさ、大胆なゆうくんなんておかしいと思ったよ……」

今度はしよげたようにチエツて舌打ちする。

言葉一つ一つに感情を起伏させて、面白い。見てるだけでも十二分な暇つぶしになるわ。

「姉に手を出すわけ無いだろ」

そう言っつて莉子姉さんの頭を軽く小突く。

「なら、ゆうくんの下半身に付いてる物を出してくれないかな？」

この人はもう末期だ、下ネタクイーンめ。

「そうゆうことね、分かったどけて」

極めて冷静に

頭の中は、もうおかしくなっちゃいそうなくらい混乱してる。

表すならば、理性の籠城でギリギリ凌いでるって感じか？

分かりづらい……

「いやー!」

…ハッ?

なんだ嫌!ーって襲うぞこのやろっ!ー!

「そんな、我が儘言っくなよ…んっ!ー!」

驚いて目を見開く、目の前にあるのは目蓋を閉じた莉子姉さんの顔。

どうやら、またもキスされてるらしい。

莉子姉さんの舌が、深く濃厚に俺の口内を犯す。

「アッ…ファ…アン…」

莉子姉さんの甘い声、息が俺の頭をおかしくさせる。

一分くらいたった辺りで、莉子姉さんの顔が俺から離れた。

「ハアハア…ゆーくん…どうだった…？」

リンゴのように赤くなった顔、トロンとしている瞳で聞いてくる莉子姉さん。

ダメだ…姉弟で…そんな…

心とは裏腹に体は言うことを聞かず、手が莉子姉さん胸に向かう。

俺はなにを…！

マズい事をしそうになった事に気付き、慌てて手を引っ込める。

「我慢する必要なんて無いんだよ…」

耳元で甘く囁く悪魔。

小悪魔なんてもんじゃないぞ、もう

そして俺の耳を歯を立てず軽く噛む、莉子姉さん。

もう…無理だ…耐えられない…

『コンコン』

俺の手が莉子姉さんの服に手が掛けた時に、部屋の戸がノックされた。

誰だ…？

「ゆう、ご飯できたよ、降りておいで」

ドア越しに茜姉さんの声

ご飯か……

…てか、ヤバいって俺！！なに考えてんの！？

慌てて、莉子姉さんを自分の上からどかす。

「チエ、あゝあ駄目だった。じゃ、私は先に下行ってるからね、ゆーくん」

そそくさと俺の部屋を跡にする。

一緒に行った方が良くない？

なんだこの放置プレー食らった気分。

第四話 次女と貞操の危機（後書き）

どうも、城崎です。

今回も二話同時更新

第三話は甘ったるく、第四話はエロく
色々とキャラを際立たせながらやっていくので、読者様に一人でも
好きなキャラが出来たら嬉しいです。

作者のやる気は感想に掛かってます。

第五話 オマケに飲負け（前書き）

はい、もうたつぷり遅れてスイマセン…

第五話 オマケに飲負け

今、リビングに居ます。

現場の彼方結城からでした。

端的な内容を述べて、キャスター風に現在の状況を説明してみた。

ハイスイマセン、どうでもいいです。

目の前に並ぶのは、朝と同じく美味しそうな夕食

勿論、雫姉さんが作ったものだ。

仕事からは帰ってきてる。

重役なのに、そんなに早く帰ってきて良いのか？という疑問があると思う。

それは、浅い話その会社の社長が理解ある人だから早く帰らせてくれるわけだな。

「なにしてんの？ゆう君、もしかしてマズそう？」

ただ座ったまま、何時までも食事に手を付けない、俺を見て色々と勘違いしちゃってくれたらしい。

今にも、涙腺が決壊しるいせん けっかいそんな顔が俺の母性本能を掻き立てる。

…いや、男だから父性本能か？

どうでもいいけど…

抱き締めたい……

「凄い美味しそうに見えるよ、早く食べたい。」

ニコニコとした、思いつ切りの笑顔を精一杯する。

笑顔過ぎて逆に気持ち悪いかも……

抱き締めたい本能を理性で抑えただけで良しとしよう。
いくら気持ち悪くとも

「やっぱり可愛いなあ、ゆう君は」

可愛い？

俺は可愛いよりも格好いいと言われる派の人間だと認知しているが

……

悲しいかな、どちらかといえばの話だ。

『ガチャガチャ』

雫姉さんの言葉を右から脳へ一回転させてから左へ受け流した後
いい具合に空いてきた、人間の欲を満たすために食事に手を付けよ
うとしたら、家のドアが音を鳴らした。

間違っても性欲では無い。

それも足りて無いから、あんな危機が起こったのかも知らんが……

「今日は早いなあ、出迎えだよ、ゆう君」

「了解…」

今更ながら、あんなバカな事を考えて無いで、さっさと食べておけば良かったと思った。

まあ、一瞬で済む話なわけだから我慢するけどさ。

早く済ませるために、少し駆け足で玄関に向かう。

「誰ですか？」

この部分だけを見れば、ドアに向かって話しかけている、危ない奴だがドア越しに人が居るのでオーケーだ。

「結ちゃん、開けて」

まあ、予想済みの人の甘ったるい声。
ハア、一瞬開けるのヤになったよ。

その間にもガチャガチャとドアが音を鳴らす。

「今、開けるからやめれ」

騒がしくてしゃあない。

無音のドアの鍵をゆっくりと開ける。

『ガチャ、ボタン』

なんだその瞬間芸は！？

俺が鍵を開けた瞬間に開くっておい

「結ちゃん、ただいま」

自分の両手を俺の首に巻き付かせてから飛んでくる。

今の状況はお姫様抱っこ

「飛ぶなよ、危ないだろ」

「結ちゃんなら、ちゃんと抱っこしてくれるって思ったもん」

拗ねたように頬を膨らませる彼女。

やば…可愛すぎる……

「ハイハイ、母さんもいい大人なんだから甘えないの」

頭をよしよしと撫でる。

俺にお姫様抱っこをねだっている彼女は、俺の母親である。

名前は彼方 はつね 初音

雫姉さんの勤めている会社の副社長にあたる人物

因みに社長は母さんの父、俺の祖父だ。

容姿は美人。

会社なんかでは副社長と美人で高嶺の初音なんて呼ばれてる、な

んて事を雫姉さんから聞いた。

正直な話どうでもいい。

やはり雫姉さんと同様で家では俺にベタベタ。

前、会社に弁当を忘れていたので届けに行った事があったが俺を見たたんコツチに飛んできて、俺にベタベタくっついてきた事が記憶に新しかったりする。

それで一緒にいた、偉そうな叔父さん達が驚いてたな。

開いた口が塞がらないって言うのはああゆう顔のことかと知った。

「私まだそんなに威張れる程年じゃありません」

声に張りがある、少しご立腹のようだ。

「そうだな、今年で23だっけ？」

「そうそう、よく覚えてるね」

そりゃあな……

家族だもん。

此处で疑問が浮かべばアナタは頭の回転と記憶力が高い。

俺は今年で高一だ。

で、母さんこと彼方初音が今年で二十三歳

…計算が全く合わない。

それどころか姉さん達までいるんだ。

ここで考えられる理由は二つ、俺と姉さん達が父親の連れ子というのと、孤児院の子供だという理由。

俺に父さんは居ない、ということは……

俺や姉さんは孤児院の子供なんだ、実はつまり俺と母さんは他人義理の親子、因みに俺と姉さん達も血は全く繋がってない。

義理の家族、でも俺はそこら辺の一家よりも絆は深いと思ってる。

…まあでも深すぎるってのも考えもんだがな……

「取り敢えず、降ろすぞ」

何時までも、持ち上げてたら幾ら軽いとはいえ疲れる。

というか姉さん達の俺たちを見る目もきつと痛いだろうしな。

「重い、とか思ったでしょ」

何を勘違いしたのか、此方を睨んでくる。

そんな事は全くを持って考えてない。

寧ろ逆、軽いとか思ってたし。

まあ、俺がそんな事を普通に言うわけがない。
勿論、

「さあね」と返しておいたさ。

「むう、結ちゃん可愛くない」

お姫様抱っこされたまま、怒られてもな……

可愛くない、ってそりゃそうたる

別に、猫仔姉さんみたく童顔じゃねえんだから。

母さんも頬を膨らますと子供っぽすぎるし。

綺麗な分、子供っぽいのは似合わないと思うがこれはコレで……

これが噂のギャップ萌えってやつ？いや、違うか……

取り敢えず、有無を言わずゆっくり降ろす。

俺、ジエントルメン

案外すんなり降りてくれたのは助かった。

降りた瞬間母さんが俺の方を向いていきなり手を出してきた。

「結ちゃん、なにしてんの？さっさと連れて行ってよ」

それを見て

「何やってんだろっ？」とか、臆気に思っていたら

「急げ」と簡単に言えば、そう言われた。

やっと理解したんだが…

手を繋いで行けと？この五メートルも無い距離を？

「勘弁してよ、姉さん達に見られたら色々とアウトなんだからさ…」

アウトってか

「お母さんには出来て私には出来ないの？」ひんがうこんはい的な疲労困憊するフラグが立つよ。

うん、確実に

「結ちゃんは勇気の欠片かけらも無いね、名前負けだよ」

「ハア」と溜め息をついた後、肩を落とすオーバーリアクション。

一つ言えることは、名前ネタはNG

それから何の問題も無しに、リビングに行くことが出来た。

「安心…なのか？」

いや、どうでもいいか

これもいつもと変わらないし。

「お母さん、お帰り〜」

なんとも猫仔姉さんらしい間延びっぷり

な〜んて思ったが、なんか声が違う。

フニヤフニヤな声

わかりやすく言うと…

「酒くさっ！！」

思わず花を摘んでしまっ…違っっ！！！！

思わず鼻をつまんでしまうほどのアルコールの匂いだ。

そこに赤い顔をした二人の女性と、至って普通の顔をした女性二人、そして床に寝っ転がっている女性一人。

そして散乱した酎ハイの缶と一、二本開けられたワインの瓶。

てか、なんでそうなんだよ！！

俺が出て行って色々と母さんと話し合った時間を、多く見積もって十分ぐらいだぞ。

なんでこの数分でここまで飲んだくれる事が出来んだよ！？

「これって…結ちゃん、どうゆうこと？」

目を丸くして俺に問い掛けてくる母さん。

それは一番私が聞きたいですよ、お母様

「わかんない…正直、この短時間にこの人達に何があったのか…？」

本音しか出ない、俺の口

問題は無いけど

そうやって暫く母さんと二人放心状態になっていたら
ヨタヨタしながら、莉子姉さんが近づいて来た。
真っ赤な顔をした女性二人の内の一人の

「ゆーくん、いつひよにによも」

いきなり肩に手を掛けてきたらお酒と一緒に飲もうってか
俺はまだ未成年だし、アンタらも雫姉さん以外未成年だろ。

ある程度力が掛かって肩に乗っている腕を払う。
勿論、返答は…

「飲まねーよ」

酒は飲んでも飲まれるなと先人は言った。

俺は確実に飲まれる。

俺は究極にお酒が弱い

前ノリに任せて少し、ほんの少しアルコールを口に運んだ事があつた。

…見事に酔いまして…その時の記憶は消えず、いまだに心の深い奥
をさまよってる……

「ええ、つれないな、ゆーくんは」

屈託くつたくの無い笑みを少し不服そうな顔に変える莉子姉さん。

うるさい、つか煩わしい、酒臭い、でもいい匂い

…ああ、完全に変態だな

この人も完全に飲まれちゃってるし

何時もなら雪みたいな白い肌も、今はリンゴのような赤い肌に変わっている。

「そうよ、ゆうはいつもノリが悪いし」

もう一人飲まれちゃっている人物、茜姉さん

って、茜姉さん！！！！

「茜姉さんに酒を飲ませたの誰！？」

俺の怒声が部屋を反響する。

別にそこまで怒ってる訳じゃないが、犯人に少しばかり説教をしないといけない。

彼女はお酒が弱い、それもべらぼうに。

言い方は古いがそこはスルーだ。

説明するのは面倒なのでその他諸々は後々に。

二分くらいすると目の前に恐る恐る手を上げる人が

莉子姉さんなわけだが……

「ゴメンね、ゆうくん……怒ってる?」

こう捨てられた猫のような目をされた今、怒るに怒られないわけで……
それに涙目、更には俺より背の低い莉子姉さんがしがみつくと自然
と上目遣いになる。

まあ、多分意識してやってはいないだろうが……

こうなると怒る所か、理性が危ない。

「ハイハイ、結ちゃんは怒らないから離れなさい」

俺達がなんやかんややっていたら、さつきから傍観に徹していた母
さんが、俺の異変に気付いたのか莉子姉さんをどかしてくれた。

「ありがとう」という目線で母さんを見たが……
なんかぶすくれてない?

第六話 戦争と見せかけた、ただの諍い

「結ちゃん！！座りなさい！！」

母さんから食事の乗っているテーブルを前に座るよう命令される。

ちよつと語尾が強いのが気になるが、そこは気にしない方向で。

俺は将来奥さんに尻に敷かれるタイプのようないきがするけれども、そこも気にしない方向で。

ちくしょう、目から体液が……

反論するのも何かとアレなので文句一つ言わず素直に座ることに。
そして俺が座った後、母さんが俺の隣に座った。

「ゆう、ホントにアンタは姉さん達に甘い甘過ぎる。」

俺が席についた瞬間、コツチにチヨコチヨコ歩いて来て、母さんの座っている逆隣にドツカリと座り出す人物一人。

『ゆう』と俺の事を呼んでる事からわかんと思うが、俺の隣に座った人物それは、赤い顔をした茜姉さんだ。

そしてここから、酔っ払い茜のワンマン酔っ払いシヨ（被害者結城ver）が行われるわけで……

「ゆうう、アンタはねえ、私の言うこと聞いてりや良いのよ」

「うん、そうだね」

「私の話ひを聞きなさい!!」

舌足らず口調で怒られてもな……

まあ、只今絶賛絡まれ中。

もち、茜姉さんに。

最悪な状況である。

先程から助けて目線を長女、次女、三女、母親に送っているが、見事全員に目を逸らされるといふ結果に。

血は繋がってないとはいえ、さすが親子！
いや…多分誰にやろうと同じ反応なのか？

「結ちゃん、あ〜ん」

とまあ考えても仕方がない事を考えていたら、いきなり横から鳥の唐揚げを摘んだ箸が近付いてきた。

軽く頬を上気させつつ、箸を持つてる人物は母さん。

なんだそれは？

恋人の夢、『あ〜ん』をやれと？

「あ〜ん」

『パクッ』と摘まれている唐揚げを素直に食べたわけだが…異常なくらい恥ずかしいんですけど……

「ゆうくん、あーん」

どうやら照れてる場合ではなかったらしい。

お次は雫姉さんが唐揚げを俺の前方から持ってくる。

アンタら、もう良い大人ですよね？

いや、スイマセン

正直嬉し恥ずかしです……

「ゆう、私のを食べてくれ」

前方へ顔を持って行こうかという時に

斜め前、雫姉さんの隣こちらから目を逸らしている沙織姉さんに唐揚げを出される。

うん、それはなんとなく予想済みなんだけど……

何故みな唐揚げ？

いや、別に嫌いじゃないんだけどさ

「ゆうくん、勿論わたひのも」

まあ、二人がやっているのに黙っているわけのない泥酔莉子姉さん。

何を持っているかは言わずもがな。

とまあ、雫姉さん順に食べて行こうか……

「んんー!!」

いきなり頭をガシツとしつかり五本指で掴まれたと思ったら、顔を横に向けられいきなり唇が俺のそれに付けられた。

と思えば驚きで少し開いた俺の口に舌と何かが侵入してくる。

しばらくすると唇が離れた、銀色の糸が俺と茜姉さんを紡ぐ

「あ、茜姉さん!!なにを!？」

「唐揚げの口移し」

いや、普通に答えてんじゃねえよ!!

「結ちゃん…なにやってんの？」

啞然^{あぜん}としていた一同だったが、いち早く平常心に戻った母さん。

お母様黒いオーラが全身から吹き出してます……

「結ちゃん…何やってるのかな?かな?」

いやいや、マジで怖いから

折るぐらいの力を込めて箸を握ってるのが更に恐怖を増幅させるんだが……

「うわっ、あかちゃん大胆……」

いや、莉子姉さんはなんでそんなにノンビリなんだよ!?

前に般若みたいなオーラを出してる人が居んのに!!

まあ、そんなこと気にしない図太さを持つてるのが莉子姉さんだけ
ど。

「…莉子ちゃんなんでそんなに冷静なの?」

声が凄く低いです…お母様。

母さんの真つ当な問いに一瞬勝ち誇ったような憎たらしい顔をし、
その豊満な胸を張った莉子姉さんはこう言った。

「ゆうちゃんとキスなら私もしたから」

てめええええええ!!!!

いや、なんとなくそんな感じの事言うなって事は、読めてたけどさ
……

手を挙げるわけにはいかないし

取り敢えず、俺は莉子姉さんを鋭い目つき睨んでおいた。

だが莉子姉さん自身は何食わぬ顔をして、サラダを口一杯に頬張っ
ていたが……

「イタッ!」

すると、突然右頬に衝撃が来た。

どうやら殴られたらしい。

「誰だ!!」的勢いを込めてキツと右を見てみると満面の笑みの母さん。

目が笑ってないとかそんなじゃなくて、まさしく笑顔。
穏やかすぎるくらいだね。

一瞬

「母さんじゃないのか!？」とか思ったが、母さん以外は俺は射程圏内に入らないため母さんしか居ない。

笑顔すぎて逆に不気味なんだが……

見ていられなくて目を逸らして、周りを見てみると姉さん達も一樣に顔が引き吊っている事に気付いた。

いやはや母さん、あの万年脳天気の莉子姉さんの顔すら引き吊らせるとは……

「あの……お母様……?」

「結ちゃん、なにかな?かな?」

なんだ素直に怖いんだが……

相変わらずの笑顔。

それが、俺の中の恐怖を更に掻き立てる。

「怒ってらっしゃる?」

「怒ってる？」なんて軽々しく聞ける筈もなく、意図せず尊敬語。いやゝ、自分のチキンっぷりには驚かされますわゝ

ほぼ現実逃避

「あはは、怒ってないよ。」

声は明るい、うん声はね……

震える拳を隠して下さい……

ハッキリ言おう、俺悪くない！

「結ちゃんさゝ、すけこまし」

ハウッ！！

グサツと来たわ！！

母さん…アンタ屈託の無い笑みで、凄い毒吐くな……

へコんだ……

「なっ！？大丈夫だ、結城！！私は結城がすけこましで女にだらしがなくて、プレーボーイで、エッチでも結城が好きだから！！」

グサ、グサ、グサ、グサ

慰めになってない……

沙織姉さん、随分と切れ味が良いじゃないかその言葉…いい加減泣くよ…？

泣かなかったよ……
耐えたよ…男だもん……

涙は出なかったけど
心の傷は深いとこまで抉られた。

まあ、俺が床にのノ字を書いていたら動揺していたので、少し気分は晴れたけどさ。

「で、この酔いづれてんのはどうすんの？」

雫姉さんと視線を交錯させる。

聞いてるわけだ。

俺の肩に頭乗つけてると、フローリングに寝っ転がってる奴の処遇を。

前者は、勿論絡んでくる酔っ払い茜姉さん。

後者は、お酒が弱いくせに何故かアルコールを飲んだ、猫仔姉さん。

いや、なんでアンタ倒れてんのよ……

猫仔はお酒飲んで一分でぶっ倒れたぞ、とは沙織姉さん談だ。

女が三人集まって姦しいと言ったものだが、5人だったら煩わしいな……

第六話 戦争と見せかけた、ただの諍い（後書き）

申し訳ないっす。とただそれだけを

期待されてる方には……居なく……は無いよね……信じてます。

今回で、まあ一段落です。

ちなみに次回更新未定！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5182e/>

姉×Sisters + オマケ

2010年10月10日00時40分発行